

## 武雄市図書館・歴史資料館と伊万里市民図書館 見学報告

2013年11月22日(金)～23日(土)

武雄市図書館歴史資料館を学習する市民の会

はじめに

第99回・全国図書館大会・福岡大会(11月21日～22日)のオプションとして提案させていただいた「武雄市図書館・歴史資料館&伊万里市民図書館」の見学ツアーでした。その後のみなさまの見聞記で“百聞は一見にしかず”の報告をいただきました。このことをまとめ情報発信する事で、さらにトップダウンの武雄市とボトムアップの伊万里市の社会教育政策の正否が見えてくるでしょう。それだけ地方分権時代(自己責任自治)の図書館政策は、地方自立のツールとして重要であると思います。ここでは、地元武雄から両館の報告を思いつくままに記述しておきます。

(図書館のハードを中心に)

まず、今回のオプションが好評であったことに感謝します。ありがとうございました。

先ず、今そこにある図書館の単体だけを見るだけでなく、その町の自然・歴史環境や土地利用や建物の履歴など、総合的に俯瞰して観ることが必要であると思っています。

大阪中之島図書館とその界限をご案内いただいた時に、さらにそのことを強く感じました。中の島の風景と船場界限、その空間にネッ

トワークされている100年建築群、中之島図書館の館内では明治大正の空気が漂っている空間に出会いました。利用・管理には不便かもしれませんが、それをカバーしてあまりあるソフトがあるのでしょうか。この状況を変えることは何人にも出来ない、と強く思いました。外部有識者会議の意見を聞く度量が大阪府・市にあったのでしょうか、何より町の持つストック(ハードソフト)の重さでしょう。現地存続が決定した中之島図書館のさらなる発展で、国内図書館のモデルになって欲しいと思います。

“何が造られたかではなく、何が壊されたか”静岡から報告は大変嬉しく思いました。それは私たちが「私たちの美しい図書館・歴史資料館」を紹介し続けていることが分かってもらえた!と思ったからです。資料集Ⅲは、美しい図書館・歴史資料館を写真集として編集したいと思います。風化させたい勢力に対しての対応もありますが、あらためて多くの市民のみなさんに改修前の両館の意味その価値評価をしてもらい復権を目指します。

写真集用に3枚の絵を書きました。すでに紹介していますが、里山に囲まれた武雄町・御船山と武雄町・図書館歴史資料館の風景ですが、まちづくりの結果はその町の景観・風景に現出されています。先を急ぐ政治勢力に対して、過去に学んでほしい!(学ばないでしょうが)あまりにも自分の町の価値評価が低過ぎます。

## I、武雄市図書館・歴史資料館

3月31日の内覧会から2回目の図書館訪問でした。自宅から歩いて10分の場所にありますが、改修オープン後一度も訪ねたことはありません。情けなくてその気が起こらないのです。それでも夜は、不夜城のように図書館が光っていますので目を向けざるを得ませんが、武雄蘭学館の外壁の“武雄図書館”の電飾看板からは“知”を感じることはできません。今は両館全体がクリスマスセール用？のイルミネーションに飾られています。

館内に足を踏み入れた瞬間に感じたのはその騒々しさです。図書館の空気ではなく、スーパーの売り場のように感じました。その原因は人の動きが激しいことにあると思います。それは迷路的な動線、分かり難い配架方法にもよると思いますが、多様な目的の入館者が動きまわっていることにあると思いました。静かな前の図書館ではBGMもかすかに聞こえ、そのことがさらに静かさを演出していましたが、今は暗騒音が高い上にそれを被せるようにBGMが流れていますので、マスキング現象が起きてさらに暗騒音のレベルを高めているのでしょう。館内も前の自然採光を主にした柔らかな環境から、人口照明主体の明暗のあるダークな雰囲気に変えられていましたが、これが都会的でシャレた雰囲気の図書館というのでしょうか？ランニングコストも気になります。

「静かに本を読んでいる人が多く滞在型の図書館になった」新聞報

道ですが、それは逆だと思いました。静かに本を読めるような環境はありません。2階の閲覧バルコニーで本に向かっている人も、直ぐ後ろを頻繁に人が通過するのでとても落ち着いて読むことは出来なんでしょう。頭上で回転する送風機も視線に入ってくると思いますが、この場所には空調設備は無く、夏期の暑さに加えて冬期でも室内暖房の上昇熱でそう長くは居れないのではないかと思います。2階の学習室も、室内に書架が配列されている関係で人の出入りが多く、利用していた高校生がその都度目を上げるような状況がありました。

子どもコーナーについても夏期に西陽の当るような場所で、「広くなった、オープンで使いやすく親子の読み聞かせに利用されている」これも新聞報道ですが、とても子どもたちが落ち着けるような環境ではありません。それに子ども用トイレも一番遠くの場所に、男女各1か所あるだけでグループ利用には対応していません。

2階の閲覧バルコニーからの避難については、その困難性を当初から指摘してきましたがそれはその通りですが、さらにバックヤード部（事務室など）を図書館に改修した部分はまさに迷路状況で、災害時避難も問題ですが犯罪が起きてもおかしくない空間になっているように感じました。公共建築としてはあり得ないことです。

見知った司書さんは笑顔を返してくれる人もいましたが、殆どの人はその余裕も無く歩きまわっている、呼び名がカタカナになったからといって能力が高まったわけではありません。それより、慣れない配架に戸惑い、従来以上の入館者の対応、整理・修理したくてもで

きない書架・書籍、泣きだしたくなるような状況で毎日を過ごしているのではないか？合板フラッシュ？の安価な作りと思える書架も、アチコチにキズが目立ち始めています。夜遅くまで働かされているのではないか？365日、朝9時から夜9時まで開館！そのセールスフレーズ？は魅力的ですが、私たち市民ユーザーは公共施設にそこまでの要求をぶっつけていいのでしょうか？官製ワーキングプアを再生産するようなことがあってはならない！と強く思いました。

市県外から来館者が多く武雄観光に貢献している、と武雄市はいます。東京代官山蔦屋書店のコピーで来館者が増えることが“武雄観光”でしょうか？

日本近代化遺産として各地で世界文化遺産登録の動きが始まりました。佐賀県は有明海の干満の差（最大7尺）を利用した「三重津造船所跡」ですが、この技術の原点も28代武雄領主鍋島茂義侯の武雄蘭学になるでしょう。当時の航海術には武雄蘭学館に展示されていた「天球儀・地球儀・六分儀」などが不可欠の道具であったと思います。当然、世界遺産登録に連動して「武雄蘭学館」にスポットが当てられてくる、そうしたいと思います。

福岡県はKLMオランダ航空の欧州直交便開設に伴い（東京・大阪に次いで3番目）、九州と欧州との直接交流の観光政策を進めています。今後、欧州の観光客を受け入れ案内するとすれば、真っ先に「武雄蘭学館」に案内したいと武雄市民なら等しく思うことです。

それは、日本近代化に欧州がどのように貢献してくれたか、その情

報を「武雄蘭学館」に蓄積していたからです。武雄蘭学館の外壁をオランダからの輸入タイルで張ったのも、そのような日が来ると予想していたのかもしれませんが。欧州・本当の先進国への感謝と言っても良いと思いますが、武雄のグローバル化は200年も前から始まっていたのです。

観光とは“そのまちの光を觀てもらう”ことです！それが東京代官山蔦屋書店のDVDCDのレンタルコーナー化では悲し過ぎます。あらためて、武雄市民のかけがえのない「武雄蘭学館」を、蔦屋書店に無償譲渡？した暴政に怒りがこみ上げてきました。

## II、伊万里市民図書館

伊万里市民図書館を訪ねるのは2度目です。名実ともに市民ボトムアップ型の市民図書館です。外部デザインは有田焼の積み出し港・伊万里港（有田焼は積み出し港の名前で伊万里焼と呼ばれていた）の倉庫群をデザインテーマにしたのでしょう。テラスの床や館内外やホールの壁などに大谷石（栃木県）風のソフトな感じの石材が多く使われていましたが、この石材は三間坂石で武雄と伊万里の境界付近で切り出されたものです。

館内にも伊万里焼の陶板が多く使われていましたが、すべてに地元・故郷伊万里を強く意識したデザインが施されていました。室内は大きな空間で自然採光も自由に取り込んでいますが、直射光線から書籍を守るために“遮光ルーバー”が小屋組み付近の高い場所に

配置されていました。（この部分は武雄市図書館のスリット窓から最小限の採光と異なる）

館内の子どもトイレは勾配屋根の小屋風で、子どもたちがどこから見ても直ぐ分かるようにデザインされていました。平面は凹凸の多いフィンガープランが採用されていましたが、このプランではコストは高くなりますが、外部との接触面積が多く快適な室内空間が得られます。さらに、フィンガーの付け根付近に司書デスクが配置されていますので、そのエリアの管理サービスも十分に施されるでしょう。

何より、そのフィンガーの一つが伊万里学（地元学）で、後一つが子どもたちの学習室であることに、伊万里市民図書館の目指す方向が見えるように思いました。

圧巻は矢張り登り窯の“よみきかせの空間”ではないでしょうか。エントランス的なステージがあり、その空間はその壁の奥に隠されていました。そのシュチエーションは、子どもたちの五感をストレートに刺激する筈です。暗いのぼり窯の室内は、伊万里の子どもたちの多くが体験済みの懐かしい空間（故郷の原風景）でしょう。

企画展示で目についたのは全体企画の原発問題、玄海原発に近い伊万里市民としては避けて通れない課題で、市民が自ら考えるように企画が継続されているのでしょう。書架の列ごとに設けられた企画展示では“伊勢神宮”が目にとまりました。日本社会が持続可能な循環型社会を目指すのであれば、“遷宮”に学ぶべきと

思います。30年ごとに更新することにより、大工技術や金属飾の技術等々の日本文化がお祭りと共に永遠に伝承されていきます。伊万里市民図書館の企画力を見せていただきました。

2階の閉架式書庫も半閉架式のように見えましたが、それはオープンな階段の昇り口に司書デスクが置かれ、2階への乗降が普通に管理できるからでしょうか。

このような環境の図書館で仕事できる司書さんは、ステップアップしていくプログラムを自ら獲得し、市民教育の基盤が造型されていくだろうと思いました。

おわりに

“環境が人を育てる”そのことは図書館の館内外に、等しく言えることではないでしょうか。その環境を造型していくのが政治・行政の仕事であり、そこに協働していくのが市民の役目だと思います。その協働の環境は水平的である・フラットな関係であるということです。そのためには政治行政が、情報公開・説明責任・透明性を市民に担保することが不可欠です。それなくして協働のプログラムは成立しません。

近年、改革派リーダーを求める風潮がありますが、それが依存に流れてはいけないと思います。独裁的な政治行政を助長しているのは私たち市民かもしれませんが、無関心は罪悪？だと思ふ事もあります。

さて、トップダウン型の武雄市の商業的図書館と、ボトムアップ型

の伊万里の市民図書館、性格が違うと思われる二つのモデルを観て  
きましたが、あなたの町はどちらを選びますか？その選択次第で、地  
方分権時代の町の方向は大きく違ってくると思っています。  
ありがとうございました。